

所属・氏名（看護学部 看護学科 氏名：新田 幸子）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (学術論文) 精神疾患患者のための在宅 療養支援システムの開発 (原著)	共著	令和元年 8 月	日本感性工学会論 文誌 第 18 巻 4 号	精神疾患患者のための在宅療養支援に特化したスマートフォンを活用したシステムの開発と評価を行った。患者が在宅療養に使用するシステムに必要な項目と機能の調査を行い、内容の評価を実施、評価結果を基にシステムを構築、システム開発後に再評価、患者がシステムを実際に使用する際に必要な観察項目と機能などを抽出、どのようなシステムが必要か明確にした。 ◎藤後 栄一, <u>新田 幸子</u> , 水野(松本)由子, 石垣 恭子
2 (資料) ドイツにおける高齢者支援-老人 介護士養成教育カリキュラム に着目して-(査読付)	単著	平成 31 年 3 月	広島国際大学看護 学ジャーナル 第 16 巻 第 1 号 2018, 53-63	ドイツは、日本と同様に少子高齢社会であり、高齢者を在宅で支援するシステムが整備されている。そして、高齢者の医療・介護は、老人介護士が担っている。老人介護士の誕生は日本では未だ聞かない。本報告の目的は、これからの日本における新たな高齢者支援の在り方を考察するためである。 新田幸子
3 (学術論文) ドイツ・ケルンの高齢者支 援・緩和ケアの提供体制(査読付)	共著	平成 29 年 3 月	第 22 号 兵庫大 学 論 集 2017(22),39-52 頁(兵庫大学)	2016 年 8 月ドイツのケルンに所在する施設(ヒルガード病院)の老人病棟・認知症病棟、ディホスピス、ケルン大学附属の緩和ケア病院と精神科病院を訪れた。さらに、ケルン大学緩和病棟の職員より高齢者支援の実態をインタビューし、ケルン南西地区の在宅支援事務所で働いている老人介護者から聞き取りや、同行訪問による実態調査を行った。これらの調査を分析し、高齢者支援の在り方を提言する。担当部分:在宅訪問実態調査(45 頁～48 頁) ◎大塚千秋 <u>新田幸子</u>
4 (学術論文) 看護学科・社会福祉学科合同 講義の意義と効果―「認知症 サポーター養成講座」を受講 した学生の学びを通して― (査読付)	共著	平成 29 年 3 月	第 22 号 兵庫大 学 論 集 2017(22),207- 214 頁(兵庫大 学)	『認知症サポーター養成講座』を看護学科と社会福祉学科合同講義として実施した結果、効果的な学習展開ができた。学生は他学科の学生とともにグループワークを行うことで、看護、福祉の視点の共通点や相違点を感じ、視野の広がりや新たな気づきを得ることができていた。。本人担当部分は全般にわたり、抽出不可能 ◎東久子 <u>新田幸子</u> 小倉 毅 和田光徳
5 (発表) Expected Utility Assessment of THE Home Care Support System for Mental patients	共著	令和元年 7 月	神戸市コンベンショ ンセンター	1 年以上入院している精神科病棟の長期入院患者の退院が進んでいる現状を踏まえ、長期入院患者の地域生活への移行を支える政策を策定・実施する必要について報告した。 ◎藤後 栄一, <u>新田 幸子</u> , 水野(松本)由子, 石垣 恭子
6 (報告) タイ・マハサラカム国立大学看護 学部での[乳がんの早期発 見のための自己検診の方法]	単著	平成 30 年 3 月	タイ・マハサラカム国 立大学	日本人女性の 11 人に 1 人は乳がんにかかっている。タイ国も、日本と同様に生活習慣の変化、平均寿命の伸長、出生数の減少などにより、乳がんの罹患率が上昇している。その予防対策として、乳がんの早期発見のためのセルフチェックと方法について報告した。